

だ よ り 美 術 館

Contents

〈展覧会紹介〉「大永平寺展」	[2~3]
〈お知らせ〉美術館喫茶室ニホ	[3]
〈展覧会紹介〉「レンブラント版画名品展」	[4~5]
〈イベント報告〉	
「古代エジプト美術の世界展 - 魔術と神秘 -」	[4~5]
米谷清和氏に聞く	
「日本画家・横山操とその時代(第二回)」	[6~7]
それゆけ! プブ広報部隊	[8]
福井県立美術館友の会「平成 27 年度 春の見学会」	[8]
〈福井県立美術館 次回の美術館交流展事業〉	[8]
菱田春草「落葉」展示情報	[8]
〈お知らせ〉休館日・貸館情報	[8]

表紙: 「伽藍神像 監齋使者立像」(部分) 鎌倉時代(13世紀) 永平寺蔵







禅の至宝、今ここに

# 太永平寺展

平成27年 10月2日[金]—11月8日[日]

## 【関連行事】

◎学芸員によるギャラリートーク  
10月17日(土)、31日(土)各午前11時から展示室にて ※本展観覧券が必要です。  
◎見どころ解説会  
会期中の土曜、日曜、祝日午前11時から 講堂にて  
※ただし10月3日(土)、17日(土)、31日(土)は開催しません。 ※参加無料

【休館日】10月13日(火)、19日(月)、26日(月)  
【開館時間】午前9時～午後6時(入館は閉館30分前まで) ※10月2日(金)のみ正午開館。  
【観覧料】一般1,000円(団体800円)・大・高生700円(団体560円)・中・小生500円(団体400円)  
【会場／主催】福井県立美術館「特別協力」大本山永平寺  
【共催】福井新聞社、FBC福井放送、福井テレビ「後援」福井県教育委員会、永平寺町、(一社)福井県文化協議会

曹洞宗の大本山永平寺は、鎌倉時代の寛元2年(1244)に開祖道元禪師(1200～53)が、越前志比庄(現福井県永平寺町)に創建した禅の修行道場です。老樹の茂る清閑とした境内には山門、僧堂、仏殿、法堂といった七堂伽藍が建ち並び、多くの僧が修業に励む根本道場として、770年以上の歴史と、多くの文化財を伝えてきました。

本展覧会は、道元を代表する著作で直筆の「普勸坐禅儀」(国宝)を始めとするゆかりの品々に、歴代禅師の肖像画(頂相)や山内の建物を飾る掛軸や襖絵、そして仏像や工芸など、初公開資料を含む秘蔵の名宝約100点を一堂に展示します。鎌倉時代から現代にいたる貴重な文化財を通して、永平寺の歴史と受け継がれた美を紹介します。



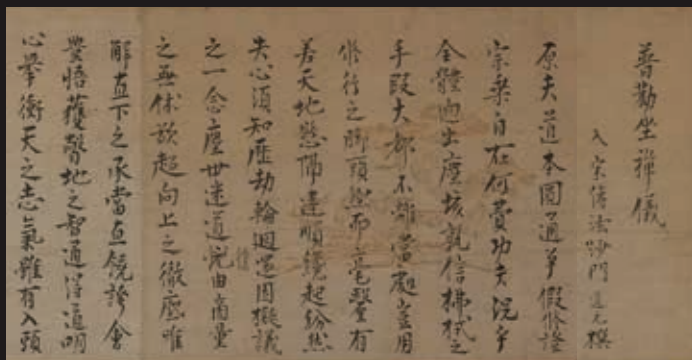
(挿図1)「道元禪師像」一幅 室町時代(16世紀)

## 第1章 道元禪師と永平寺のあゆみ

第1章では、道元の著作やゆかりの品々を通して、その人と思想、永平寺のあゆみを紹介します(挿図1)。道元は公家の出身で、13歳で出家して比叡山に上りますが、18歳で京都建仁寺で榮西禅師の高弟明全に師事します。その後24歳で求法のため入宋した道元は、やがて天童山の如浄禅師と出会い、「身心脱落」の境地に達します。その後、28歳で帰国、禅の教えを広めることに邁進します。しかしながら、その名声が次第に広まるにつれて、旧仏教からの弾圧に遭います。そして、寛元元年(1243)、その拠点京都から越前志比庄(現福井県永平寺町)へと移し、永平寺を建立しました。

### ◎道元ゆかりの品々

道元の思想において根本になるのは坐禅の実行です。その思想を端的に示しているのが、道元直筆の「普勸坐禅儀」です(挿図2)。これは、坐禅の意義や方法を示しており、現在国宝に指定されている大変貴重な書です。その謹直な字には、修行に対して厳格な姿勢を貫いた道元の人格が窺えます。



(挿図2)「国宝」道元筆「普勸坐禅儀」一巻 鎌倉時代・天福元年(1233)

### ◎躍動する鎌倉彫刻!

度重なる火災を潜り抜けてきた永平寺には、鎌倉時代までさかのぼる彫刻が数点伝わっています。なかでも「監斎使者立像」(表紙・挿図3)の左足をけり上げて走る姿は躍動感に溢れています。



(挿図3)「伽藍神像 監斎使者立像」鎌倉時代(13世紀)

## 第2章 永平寺の名宝

大本山永平寺は、創建以来、度重なる火災や、一向一揆の戦火に遭いながらも、そのたびに復興され現在まで貴重な宝物を伝えてきました。本章では、770年の長きにわたって守り伝えられてきた永平寺の名宝を紹介します。

### ◎ 狩野探幽晩年の瀟洒な花鳥画

縦150cmを超える大幅に、梅に金鸚鵡、柳に白鷺、紅葉に白鷗、雪松に鶴など、四季それぞれの花木や鳥を描いた四季花鳥図の四幅対(挿図4)。作者は江戸狩野の確立者で、瀟洒な画風でそれまでの狩野派を一変させた狩野探幽(1602～74)。本作は、亡くなる二年前に描かれた探幽最晩年を代表する作品として見応え十分です。



(挿図4) 狩野探幽「四季花鳥図」四幅 江戸時代・寛文12年(1672)

### ◎ 寺崎廣業の絶筆！

明治後期から大正前期の日本画壇を代表する日本画家・寺崎廣業(1866～1919)が、亡くなる年に描いた畢生の大作です(挿図5)。連峰の雄大さ、屹立する山なみが的確に捉えられ、金地に鮮やかな群青が映える良作です。



(挿図5) 寺崎廣業「ヒマラヤ図」六曲一双 大正8年(1919)

本章では、明治維新後の永平寺の動向について、近現代日本画家との交流を中心に紹介していきます。画家たちは、禅師との交流を通して、あるいは大遠忌の記念事業の一環として多くの作品を山内に残しています。永平寺に伝わる名画の数々をご覧ください。

## 第3章 永平寺の近現代美術

### ◎ 伊藤彬と田淵俊夫によるモノクロームの競演

2002年、道元禅師の没後750年を記念して、現代日本画家の伊藤彬氏(襖18面)と田淵俊夫氏(挿図6、襖両面12面)が襖絵を奉納しました。墨の濃淡によって紡ぎだされた静寂な空間、また壮大なテーマ設定のもとに構成された画面は圧巻です。



(挿図6) 田淵俊夫「春秋」十二面のうち四面 平成14年(2002)

※会期中展示替があります。※作品はすべて永平寺蔵。

美術館  
喫茶室

二ホ

### 大永平寺展 スペシャルメニュー

### 「ごまごまプリンパフェ」セット 850 円

永平寺で修行僧たちに貴重なタンパク源として食されてきた「ごまどうふ」にヒントを得た、ごまのスイーツをご用意しました。

黒ごまベースのプリンに口だけのよいごまのケーキとアイスクリームをトッピング、お好きな飲み物とセットどうぞ。



### Contact

### 美術館喫茶室 二ホ

open : 9 時～19 時

closed : 月曜日

tel : 0776-43-0310 \*無料 Wi-Fi\*

address :

〒910-0017 福井市文京 3 丁目 16-1

福井県立美術館 正面左手

※美術館が休館でも、月曜日以外は営業しております。



# レンブラントハウス所蔵 レンブラント 版画名品展

The Rembrandt House in Japan

2015 \*大永平寺展の観覧券にてご覧いただけます

10.2Fri — 11.8Sun



MUSEUM  
HET REMBRANDTHUIS



レンブラント「病人たちを癒すキリスト」  
(百グルデン版画) / 1648年頃  
エッチング、ドライポイント、エンブレイビング、第二ステート(全4)、27.8×38.8cm アムステルダム、レンブラントハウス美術館

関連イベント(予定)

●講演会 10月3日(土) 午後1時30分～  
講師/レオノーレ・パン・スローテン(レンブラントハウス美術館)  
石川浩(福井県和紙工業協同組合)

●子どもワークショップ 10月24日(土)  
越前和紙による銅版画の刷りを体験しよう  
講師/三井田盛一郎(東京藝術大学)

※お問合せは、福井県地域産業技術振興課まで TEL:0776-20-0377 Email: chisangi@pref.fukui.lg.jp



右から、ベッソン氏、ピアンキ博士、西村学芸員

## 《イベント報告》



FONDATION  
GANDOUR  
POUR L'ART

ガンドゥール美術財団の至宝

# 古代エジプト美術の世界展

— 魔術と神秘 —

会 期：2015年7月3日(金)～8月30日(日)

主 催：古代エジプト美術の世界展実行委員会  
(福井県立美術館、福井新聞社、福井テレビ)

福井県立美術館では、福井新聞社および福井テレビと実行委員会を組織し、7月3日(金)から8月30日(日)までの会期で、「古代エジプト美術の世界 — 魔術と神秘 —」展を開催しました。

この展覧会は、スイスのガンドゥール美術財団が所有する世界屈指の古代エジプト美術コレクションの中から、約150点に及ぶ貴重な作品群を日本初公開するものです。

「ヒエログリフの魔術」、「素材の魔術」、「色の魔術」をキーワードとして、石碑、レリーフや様々な副葬品に刻まれたヒエログリフや図像のデザインを読み解き、そこに使われた素材や色から、古代エジプト美術の魅力的で象徴的な特徴に焦点を当て、その魔術と神秘の世界を広く紹介する内容となっています。

このような魔術と神秘の世界を体感するため、県内外から連日、大勢の美術ファンが来館し、最終的な入館者数は、当館の歴代2位となる約6万3千人に達しました。このため、駐車場からのシャトルバスの運行や開館時間の延長等を行いました。

会期中は、毎日、学芸員による「見どころ解説会」が実施され、解説を熱心に聞く方が多いため、質問コーナーの設置や土・日曜の午前・午後2回開催を実施しました。また、「ハムナプトラ/失われた砂漠の都」の無料上映会(観覧チケットの半券提示による映画館への入場: 7月17日)、県立図書館での講演会「古代エジプト美術の見かた」(7月25日)、学芸員によるトークサロン「展覧会ができるまで」(8月22日)が開催されるとともに、ワークショップ「消しゴムはんこ作りに挑戦!」や「教員研修会」、「学校鑑賞会」等も開催され、多くの関連イベントが実施されました。

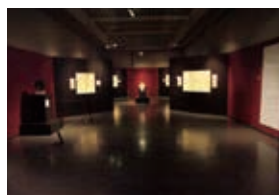
広報では、当館独自の対応として、福井夏祭りイベントの「ぺんたワイワイ夏まつり ペンタサマーライブ」ステージでのPR、エジプトビール・パンにちなんでビール提供・パン販売店舗でのチラシの配架、大型書店や鉄道駅前でのチラシの直接配布等を行いました。また、テレビでは、本展を特集した番組やスポットCMが数多く放映されるとともに、新聞では、見開き2面の特集や12回に及ぶ作品紹介の記事等が掲載されました。

これらの対応を実施したことから、入館者へのアンケートでは、約8割の方が「大いに満足・満足」とされ、中には10回来館された方もありました。

当館としては、この展覧会に御来場、御協力いただいた皆様に対して、この場をお借りしまして、厚くお礼申し上げます。



展示風景



ヒエログリフの魔術



素材の魔術



色の魔術



【休館日】  
10月13日(火)、19日(月)、26日(月)  
【開館時間】※10月2日は午後12時～午後5時  
午前9時～午後5時(入場は午後4時30分まで)

【観覧料】  
一般500円(団体400円)  
高・大生400円(団体320円)  
小・中生300円(団体240円)  
※団体は20名以上。※学生の方は学生証の提示が必要です。  
※障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は半額。

【主催】  
福井県、福井県立美術館  
【後援】  
福井県教育委員会  
【特別協力】  
レンブラントハウス美術館、福井県和紙工業協同組合

レンブラント・ファン・レイン(1606-1669)は、黄金の世紀と呼ばれた17世紀オランダを代表する画家であり、「光と影の魔術師」「明暗の巨匠」と呼ばれ、光の探求や陰影表現、明暗法を終生追求した作家でした。またエッチングや複合技法による銅版画でも多数の作品を残し、版画の巨匠としても広く知られています。

本展では、オランダ・アムステルダムのレンブラントハウス美術館の全面協力のもと、同館所蔵の重要なレンブラント版画作品や、かつてレンブラントが住み、現在は美術館となっているレンブラントハウス(レンブラントの家)を紹介します。

1647年頃から、レンブラントは当時のオランダの東インド会社を通じてもたらされた東洋の紙を使い始めました。それらの中には和紙が使われており、越前和紙である可能性も指摘されています。本展に合わせて行われた和紙刷りのレンブラント版画作品の調査結果についても紹介します。

レンブラント「石の手摺りにもたれる自画像」/1639年  
エッチング、ドライポイント、第二ステート(全2)、20.5×16.4cm  
アムステルダム、レンブラントハウス美術館

# REMBRANDT



## 関連イベント

### ◎見どころ解説会

【開催日】7月3日(金)を除く会期中毎日  
【時間】午前10時30分～  
※会期後半の土・日曜日は午後2時頃～を追加  
【場所】講堂  
【講師】当館学芸員



毎回約40分間にわたって行われた「見どころ解説会」



見どころ解説会後に質問を受けつける西村学芸員

### ◎講演会

「古代エジプト美術の見かた」  
【日時】7月25日(土)午後2時～  
【場所】福井県立図書館  
【講師】西村直樹(学芸員)



講演会「古代エジプト美術の見かた」

### ◎美術館学芸員トークサロン 「展覧会ができるまで」

【日時】8月22日(土)午後5時～  
【場所】美術館喫茶室ニホ  
【講師】西村直樹(学芸員)



美術館学芸員トークサロン「展覧会ができるまで」

## PR活動

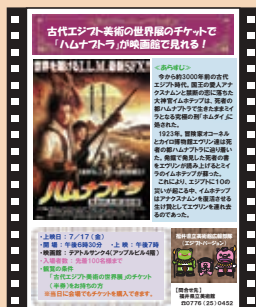
「べんたワイワイ夏まつり ベんたサマライブ」(8月2日)のステージに本展担当の西村学芸員が登壇。人気芸人「ジャガーズ」と「キンタロー。」の幕間約10分間を借りて、大聴衆を前に、展覧会を面白可笑しくPR



テレビ関係者から「キンタロー。の出だしと同じくらい受けていた」と評されていた



本展を特集し、会期中7回放送された福井テレビの番組「タイムリー-ふくい 古代エジプトの美術展 福井市で国内初公開!」



「ハムナプトラ」失われた砂漠の都」上映会のチラシ

# 日本画家・横山操とその時代 (第二回)

米谷清和氏に聞く

## 横山操

1920年新潟県西蒲原郡吉田村(現燕市)生まれ。昭和を代表する日本画家。洋画家をめざして上京し、1940年青龍社展で入選。その後徴兵されシベリア抑留に遭い1950年に帰国。同年に初の個展で「網」「川」等を出品、「炎炎桜島」で青龍賞を受賞。1962年に青龍社を脱退。1966年に多摩美術大学日本画科教授に就任、熱血指導で学生に慕われ、多くの日本画家を育てた。1971年に脳卒中で倒れ右半身不随となり左手で制作、1973年に制作途中に亡くなった。

## 米谷清和

1947年福井市生まれ。1972年第4回日展に「エレベータ」が初入選。1973年多摩美術大学大学院修了(修了制作「エレベータ」)。1985年山種美術館賞展優秀賞。2002年福井県立美術館にて「米谷清和展」開催。現在、日展評議員、多摩美術大学教授。

聞き手 佐々木美帆(福井県立美術館学芸員)

## 1. 画家となってから

僕は日展というところにいながら、塾に入った事はありません。その当時、僕らの年代だと塾に入るのが当たり前で、入らない唯一の人間でした。後ろ盾がないからはじめ者にされますが、高山辰雄さんは誰のお弟子さんでもないから話しやすかったみたいで、町で会うと向こうから声を掛けてくれました。僕からは挨拶は出来ても声を掛けることは出来ないですよな。「米谷君、お茶飲みにいかない」とか誘われたのは後ろがいなかったから、逆に気楽に誘われたのだと思います。

それで高山さんのお弟子さんの個展をやっている画廊喫茶に連れていかれました。そこに作家はいなくて「この絵はどう思う」と聞かれて、僕は好きということを書えなくて逆にお聞きしました。「先生は若い頃、ゴーギャンに影響されたって、いろんな雑誌に描かれているし、ご本人もテレビで話されているのを聞きましたけど、影響と真似の違いは、先生はどのへんにあると思いますか」

—率直ですねえ。

割とズバズバ言うほうなので。それで「米谷君はどう思う」と聞かれました。頭のいい人だから、相手の事を先に読めるのですよね。(言わせるのか)と思いながら、「個人的には最初の1点目は影響だと思います。2点目からは真似だと思います。」と言いました。そしたら、「僕もそう思う」という言い方をされました。

実はこの話には裏があって、僕らの若い頃の日展は高山辰雄調の絵がめちゃくちゃ多かったのです。だから画廊喫茶の絵も高山辰雄調の絵だった。そしてむやみやたらな厚塗りが多かったのですよ。それで、「必要以上に絵具を厚く塗る事を先生はどう思われますか」と聞きました。

—随分ズバズバと。

僕、そういうタイプだったのですよ。「若いときは仕方ないのだよ」とおっしゃるから、「先生は何歳までが若いと思われますか。僕は31歳になったけど、もういい年だと思っています。若くはないと思っています。学校の先輩から見れば20代で歴史に残るような絵を描いている人もおられます。そういう

意味で、若くはないと思います」

「君はそう思うんだ」

とその辺で、青筋が立ってきたのでやめました。

僕はそのとき横山操に習っていて、2人のときは「言いたい事を言え」って色々言われていました。展覧会を見ると「感想言え」って言われて、いろんな絵描きのいいところと悪いところを言ったりしていました。

それでちょうど初入選(1972年)した次の年に、加藤東一さんのところに呼ばれたんですよ。若いのは土屋礼一とかがいて、酒を飲みながら話をして、そのうちに色々な絵の話になりました。

今考えたらよくない、自分の人生訓となっている話ですけどね。

以前に加藤東一さんが、内閣総理大臣賞(1970年)をとったんですよ。それで僕は何を思ったのか「先生、総理大臣賞は残念でしたね。あの絵は残りませんよ」そういう話をしちゃったんだ。「まだ、加藤栄三さんが亡くなられてまだ今年だったら、可能性があるかもしれないけど、あの絵は」といういい方をした。そして今度は、「東山魁夷とか杉山寧とか、高山辰雄が偉くなったのは分かるけど、何で先生が偉くなっているのか分からない」と言い始めた。

でも、その時に東一先生が言ってくれたことが僕の人生訓になっているんです。

「米谷君いくつ？」僕24歳だったんですよ。

「いいよねえ。僕はもう30代もない、40代もない、50代も終わろうとしている。だけど僕にやれることは、この絵が一番いい絵になる。それを願って、描くしかないんだよ」

—なんていい方。涙出て来ました。

普通、「あの野郎、生意気だ」で終わりでしょ。「殺しちゃえ」「二度と日展に入れないようにしてやれ」って。だけど東一先生は後も色々誘って下さって、僕が日展に審査員になったときも、どうも東一先生が推薦してくれたらしいです。その時に、言われました。

「米谷君。初めて会った頃と変わらない君を信じているから」

そうやって送り出してくれたのです。弟子でも何でもないので。

それもあるって、後輩に対して寛大でありたいという人生訓を得ました。

若い時は生意気で当たり前のところあるじゃないですか。生意気なぐらいでないと困る所もあるじゃないですか。そういう後輩に対して、僕は寛大でありたい、威張らないでおこう、というのは僕の人生訓です。ありがたい話です。

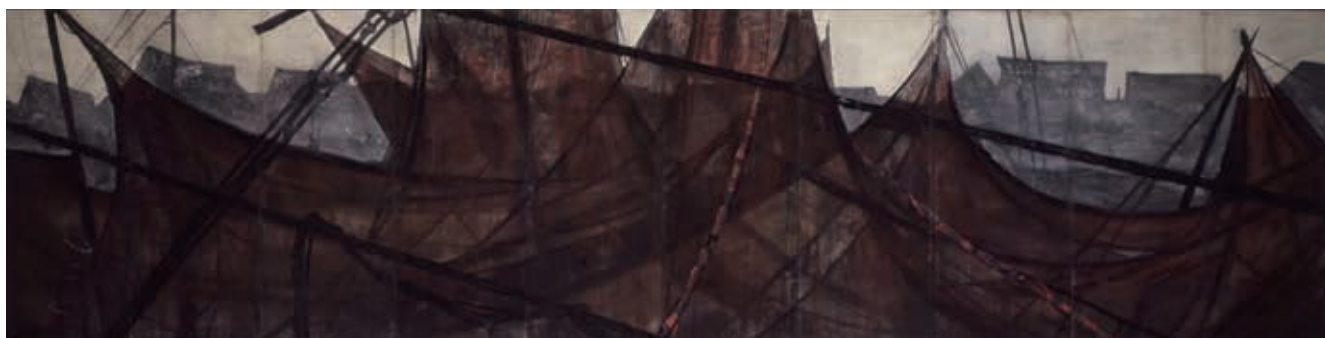
生意気でしょう、僕、すごいこと平気で言ってる。東一先生はふわっと、柔らかく何でもないかのような感じでその場は別れるのだけど、後で自分が気づくって感じがします。

高山辰雄先生の場合は話している最中に(あ、怒っているな)と気づくんですけど、高山先生も90幾つになってもずっと僕を呼んでくれていました。

僕が初めて特選をとったとき、高山先生のお弟子さんが「高山先生が米谷君を呼んで来てくれというから一緒に行かないか」と、呼びに来てくれて一緒に行きました。そしたら「米谷君。僕のところに来よう、川崎鈴彦さんのところに行きなさい。彼がいなければ、君みたいにフリーの人が賞をとれることは絶対ない。彼が強く君の絵を押して賞を取れたのだから僕のところに来よう、彼のところに行きなさい」と発表の前の晩に呼ばれました。

それで次の日、川崎先生のところに行きました。そしたら門を開けてくれなくて、門越しに言われたのが「君がこんなところに来たら元も子もないじゃないか。だから、今日は帰ってくれ。普段遊びに来てくれるのは大歓迎だけど、今日は帰ってくれ」と門前払いを食らいました。

それから僕は日展で賞をとっても審査員の指名があっても挨拶回りを一切していません。



横山操「網」(当館蔵)



去年のことがあって日展はもう挨拶廻りをしなくなったけど、僕は 35 年以上前から唯一、挨拶廻りを一切していません。ある作家さんが「米谷って奴がいる、あんな無礼な人間になっちゃいけない。あんな礼儀知らずな人間になっちゃいけない」って塾の研究会で僕の名前を出して批判したっていう話を 3 回位聞いたことがあります。

だけど僕は当時から、鈴彦さんが日展を変えるために逆にそういうことを僕に望んでいるのになって思って、一切挨拶廻りもしていません。賞とったときも審査員のときもしていません。でも他の人は鈴彦さんも含めて全員がやります。というのは、他の人は本人ではなくて塾の代表として挨拶に来ているのです。僕は個人だからそういうことをやめると言ってくれたんだろうと、自分で勝手に解釈してやめて、挨拶廻りはその後一切していない。

それでもいいという人がいたからよかったんですけど、最近そうやって育った人ばかりが上にいるので、こういう奴が煙たいのです。だけど、ちょっと前まではそういう先生たちがいらして、こんな人間もいてもいいじゃないかって感じで僕は座っていられた気がしますね。

## 2. 「網」、「川」について

—昭和 52 年に当館が開館して間もなく、横山操の「網」と「川」がご遺族から寄贈されました。このことについては米谷さんが仲介して下さったと学芸の先輩から聞いていますが、どういう経緯だったか教えて頂けませんか。

先生が亡くなられたあとにちょうど福井の美術館が出来たので、作品を寄贈して頂く運びになりました。横山先生の作品は、まだこの美術館にも入っていない時で何でも頂けたんですけど、僕は個人的に「溶鉱炉」（現在福岡市美術館蔵）は北九州、と話だけ聞いていました。「炎炎桜島」（現在新潟県立近代美術館・万代島美術館蔵）も決まっていなくて取り放題だったのだけど、やはり「炎炎桜島」は横山操の代表作だったので、もっと大きい美術館に入って欲しいなという個人的な願望がありました。それ以外ですごく好きな作品が「川」で、真っ先にこれを決めたいんです。その次にどうしようかと考えたけど、箔に描いた時代の絵は結構痛んでいる絵も多かったのです。そういう意味では当時有名だった「網」がいかんと思って、「網」と「川」をくれないかと頼んで、それで美術館に寄贈されました。本当はねえ、今考えたら「炎炎桜島」もって言えばよかったのだけど、その当時はもっと大きな美術館に入って欲しいなと思って。

—取り放題だったんですか、…。

—そうなの。だから最初 1 点だけというのを 2 点にしてもらった。

—新潟県立近代美術館に「炎炎桜島」が入りましたね。

それは横山操が新潟出身で、奥さんも新潟の人だから。福井が取って、1 年か 2 年あとに新潟に入っていると思う。それで、小泉さん（小泉智英氏）が「間迫る」かな、それと「建設」を福島に入れましたけど、「建設」というのはボロボロすぎて修復の方が大変で、美術館が引き取らなかったのが、福島にいったのだと思う。それで修復したのだと思う<sup>1</sup>。

—箔を貼ってある作品がボロボロになるんですか。

—というのは、艶を出すのに膠を塗ってあるのです。箔だけだといひんだけれど、箔の上から膠を塗っていた時代があって、それが時代を経るにしたがって、膠が縮んで、反るからめくれてきちゃって。

—「網」「川」は箔が使っていないから状態がいいのですね。

僕は先生のお宅の居間で「川」と「網」って決めて、八百山さん（当時の学芸員）に連絡して一緒に谷中のアトリエに確認に行きました。「炎炎桜島」は勿論いいですけど、それ以外の横山先生の手元にある作品で僕は「川」が一番好きでした。最初の個展の絵であるし、白黒で描いたのはあの作品だけで、ゆくゆくは水墨になるその出発点でもあるし、華やかな横山操と違う要素を一杯持っています。僕らが入った頃には「網」も代表作の一つと言われていました。「川」は全然そういうことには言わ



横山操「川」（当館蔵）

れなかったけれども僕は実物見て、「川」の方が好きで「川」を選んで、八百山さんも好きだって言っていました。

—「網」も「川」も、日本画家定番の和紙ではなく木綿に描いているのを、前から不思議に思っていました。

—お金がなかったんです。

木綿は絵画用じゃなくて、市井の布地屋にあったヤール幅のものを買ってパネルに貼っています。その上に胡粉でバテ埋めしてこすっているから、ベニヤとくっついて剥がせないのです。

あの頃、先生は 2 ヶ月半ぐらいの短期間で「溶鉱炉」、「川」、「網」などを描きましたが、木綿地を平にする下地作りの方が大変で、夫婦 2 人掛かりだったらしいです。

—あの大きな画面を胡粉でつぶそうと思ったら、連日胡粉練りですね。

大変でしょ。しかも縦 2.25m ぐらいの、30 何枚分を全部です<sup>2</sup>。キャンバス用の木綿じゃなくて隙間だらけが目荒いのから、埋める準備に掛かった時間の方が長かったみたいです。

—胡粉が隙間に吸い取られてしまうからですね。

だからベニヤ板まで浸透して、はがせなくなったんです。絵画用のキャンバスだとそんなに染み込まないでしょ。

—そこまでしてでも大きい絵が描きたかったということでしょうか。

初の個展<sup>3</sup>ですからそうだったのでしょうね。銀座松坂屋のその個展では最初、吹き抜けの上から下まで、だんと垂れ下がるような作品を計画したけれども、消防法で駄目で、しょうがない、やめたんだって。今だったらいろんな方法あるけど、当時は画廊の横にしか並べられなかった。

—だから木綿で横に大きい絵を描いて。

—それに寧ろ描くよりも作る方が実際大変ですよ。

—百号を全部胡粉で埋めるだけでもすごい胡粉の量なのに。

—ましてやそれを紙じゃないでしょ。

—布地だとどんどん染み込むし。

ねえ。あれだけ大きい画面で。それに、いっぺんに何 10 枚もやれるわけじゃないでしょ。広いところを借りていたとはいえ、大変だったと思います。

—絵の具も溶くのも墨を磨るのも大変だったのではないのでしょうか？

でもね。その頃は聞いていると墨じゃないでしょ。ドイツブラックというか、カーボンだと思うんですよ。それで、大きい刷毛が買えなかったから、線は筆で描いたって言っていました。それで、ペインティングナイフの代わりに木の切れ端を使っている。

—筆ですか、…。新しい画材の登場ですね。

—本人がそうしていました。

若い頃に「カザフスタンの女」っていうのを描いているでしょう、あの時の盛り上げは木屑ですよ。のこず。画材を買えなかったから、木工所で木屑を買って、バケツに一晚膠の中につけてそれを使ったっていう話でした。お金は無いなりに工夫は出来るものだったという言い方を僕らにはして。（次号に続く）

1. 福島県立美術館学芸員の増淵鏡子氏によると、「間迫る」「建設」の 2 点は昭和 56 年度に横山基子夫人から同館に寄贈され、その後修復された。作品が収蔵された経緯は、福島出身の日本画家・小泉智英氏の仲立ちで、小泉氏とつぎあいのあった当時県の文化課にいた院展作家・斎藤勝正氏を経由して、夫人から 2 点ご寄贈をいただいたということである。

2. 作品状態は悪かったものの、収集評価委員の 1 人であった修復家の黒江光彦氏の、修復すれば十分鑑賞できるという判断によって収蔵が決まりその後修復された。福島県立美術館では昭和 58 年度には「黒い工場」を購入しており、それも修復している。

こうしてみると、福井では米谷氏、福島では小泉氏と、横山の教え子たちが各ゆかりの美術館の横山作品の寄贈に関わったということになる。

2. 「網」は縦 2.25×横 9m、「川」は縦 2.26×6.3m 3. 1956 年 1 月、第 1 回個展を銀座松坂屋で開く。「網」、「溶鉱炉」、「架線」、「川」、「木」を出品

## 〈平成27年度 春の見学会〉

日 時 ◎平成27年6月24日(水)

今年春の友の会旅行は京都日帰り旅行でした。参加者数64名だったので、バス2台でゆっくりと移動できました。

見 学スケジュールは、まず細見美術館で「琳派古今」展を見て、午後から京都市美術館の「ルーブル美術館―日常を描く―風俗画に見るヨーロッパ絵画の真髄」展と、京都国立近代美術館の「北大路魯山人の美 和食の天才」展を見学するという内容でした。

「琳派古今」展は、2015年が琳派誕生から400年目に当たることを記念して京都で開催される「琳派400年記念祭」の諸事業の一環として開催された展覧会です。

また「ルーブル美術館―日常を描く―風俗画に見るヨーロッパ絵画の真髄」展は、ルーブル美術館所蔵の美術品の中から、風俗画に焦点を当てて約80点の作品で開催された展覧会で、日本初公開で目玉のフェルメールの「天文学者」の美しい青色が魅力的でした。

「北大路魯山人の美 和食の天才」展は、和食がユネスコ無形文化遺産に登録されたことを記念して開催されたもので、和食の天才の言葉通り、魯山人の料理に対する意識を器から垣間見ることのできた展覧会でした。

かなり疲れましたが、これら3展とも見応えがあり、参加者の皆さんは満足されていました。

## 福井県立美術館 次回の美術館交流展事業

ふるさと知事ネットワークによる美術館交流事業

## シャガール展 一高知県立美術館コレクションによる一

“ふるさと知事ネットワークによる美術館交流事業”の第4弾として、平成27年度は高知県立美術館のシャガールの豊富なコレクションの中から、版画集『聖書』、『アラビアンナイト』からの四つの物語、『ダフニスとクロエ』、『オデュッセイア』に収録された名品を中心に、人間の様々なドラマを詩情豊かに表現したシャガールの世界を紹介します。

会 期 ◎平成28年2月19日(金)～3月21日(月) 会期中無休

開館時間 ◎午前9時～午後5時(入館は閉館の30分前まで)



絵・文 ささきみほ

## 菱田春草「落葉」展示情報



菱田春草の「落葉」(明治42～43年)は12月5日(土)から12月13日(日)まで所蔵品によるテーマ展(一般100円)で展示します。

また、年明けには横浜そごう美術館で展示します。

そごう美術館開館30周年記念 福井県立美術館所蔵

## 日本画の革新者たち 一特別出品 菱田春草《落葉》一

平成28年1月16日(土)～2月16日(火)

主催・会場：そごう美術館(横浜市)

そごう美術館では開館30周年を迎え、新たな取り組みとして地方美術館の名品を紹介するシリーズをスタートします。その第一弾で当館のコレクションが紹介されます。

本展は、「日本画の革新者たち」をテーマとし、明治期の美術界を牽引した天心率いる日本美術院の作家たちや、戦後日本画の新たな表現に挑戦した横山操、加山又造、三上誠などの作品、さらに江戸時代初期に福井の地で多くの代表作を手掛けた、奇想の絵師として人気を集める岩佐又兵衛の逸品を展覧します。

## お知らせ

◎2016年1月～2月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、次の日は休館とさせていただきますのでご了承ください。

1月1日(金)、2日(土)、18日(月)～21日(木)、2月15日(月)～18日(木)

## 貸館情報 [2015.12/3～2016.2/28]

2015	12/3～12/6	第65回福井県勤労者美術展	1/13～1/17	第34回映彩会水彩画展	2/5～2/7	福井工業大学建築環境学科卒業研究展
	12/3～12/6	墨映会 水墨画展	1/14～1/17	第4回シルバー福井美術展	2/5～2/7	第5回こっとんくらぶの布遊び展
	12/3～12/6	第29回新彫会彫刻展	1/15～1/17	書勢会展-会員展 読書展	2/10～2/14	第39回力加展
	12/10～12/13	福井県高等学校総合文化祭 美術・工芸・書道・写真展 特別支援学校作品展	1/22～1/24	第63回福井奎星展 会員展・公募展	2/12～2/14	福井大学書道研究室・書道部 平成27年度修了・卒業・卒部制作展
	12/18～12/20	第45回若越書道会展	1/22～1/24	平澤善治郎 画家展	2/13～2/14	科学技術高校 テキスタイルデザイン科卒業制作展
	12/24～12/27	第65回福井書法展	1/22～1/24	第1回丸岡高校書道部 学外展	2/19～2/21	杉本嘉美子キルト教室展
2016			1/27～1/31	「女流作家三人展」(敦賀)＜陶・絵・書＞	2/19～2/21	福井高校デザイン分野 第49回卒業制作展 第9回OB展・在校生作品展
	1/7～1/11	すてんどくらず・オリビエ第4回生徒作品展	1/27～1/31	今はまた旅の途中-福井公太油彩展	2/19～2/21	第43回一書会展
	1/8～1/11	第25回日本画会陽花展	1/29～1/31	第25回表装展-福井県表装組合連合会	2/24～2/28	第9回スプリングアート合同展
	1/8～1/11	第10回アトリエ羊庵展	1/29～1/31	第34回恩泉書道展	2/24～2/28	福井県庁退職者連盟会員第6回作品展
			2/5～2/7	第36回日本墨書会展	2/25～2/28	福井デザイン専門学校創作展